

It is that 節構文の意味と談話機能  
—— 「のだ」文との比較・対照 ——

大 竹 芳 夫

英語の談話で頻用される表現に、(1)の如き It is that 節構文がある。

- (1) But why after seeing Skip did you not want to help him? Especially in light of what's been uncovered about Dr. Smith." "It's not that I didn't want to help him, Mrs. Rearden. It's that I can't help him." (M. H. Clark, *Let Me Call You Sweetheart*)

(1)の It is that 節構文は(2)に示す文末に「のだ」を伴う日本語の「のだ」文とよく対応する。

- (2) 私は彼を助けたくなかったのではない。彼を助けることができないのだ。

「のだ」文に関する先行研究において It is that 節構文はその英訳として言及されてきた(Kuno 1973; 池上 1981; 野田 1997)。名詞節化機能を果たす that と「の」に導かれる節をコピュラの be と「だ」の補文として従える両構文は意味的・機能的に普遍性を示すが、併せてそれぞれの個別的特性も着目されなければならない。第一に、It is that 節構文も「のだ」文も先行情報を話し手の知識と関連付けて同定し、解釈を与える機能を有する。そのため、両構文は言語的にも非言語的にも発話の契機となる情報が与えられていない談話の冒頭では用いられない。

- (3) Oh! {I have/\**It is that* I have} no money.

- (4) あれ、お金が{ない/ ??ないんだ}。

しかし、「のだ」文は談話冒頭であっても非言語的な場面的状況を受けての発話が容認されるのに対して、It is that 節構文は先行性が言語的文脈により保証されない限り容認されないという相違がある。

- (5) [話し手が脚を搔きながら]

a. \* *It is that* I was bitten by a mosquito.

b. 蚊に刺された のです。

第二に、*It is that* 節構文も「のだ」文も先行情報を単純に換言するだけの情報の提示はできない。

(6) a. They completely clammed up. {*That is,* / \**It is that*} they refused to speak.

b. Nobody has invited me to dance. {*It is that* / \**That is,*} I'm not pretty enough.

(7) 国会は二院から成る。すなわち、衆議院と参議院 {である / \*なのである}。

両構文は聞き手には容易に同定しがたい情報を表現し、(A)話し手の論理で解釈を提示する場合と(B)実情を披瀝する場合とがある。「のだ」文には(A)の標識「結局(は)、つまり(は)、要は」、(B)の標識「実際(は)、事実(は)、実は、本当は、事情は」が文頭に顕現することがある(田野村 1993)。It is that 節構文には主節主語 it が語彙名詞句により限定され、(A)の標識“*The {gist/conclusion} of it is that...*”、(B)の標識“*The {fact/truth/thing} of it is that...*”が具現化する事例が見受けられる。

(8) The Aussies are doing their best to unsettle the Poms, so Glenn McGrath growls, Ian Healy grumbles, the press grins - and decent men grimace. *The gist of it is that* England have no chance, mate. (*The Guardian*, October 22, 2002)

(9) Rehabilitation is not our job. *The truth of it is that* we are warehouseers of human beings. (*The Observer*, August 19, 2001)

注意が必要なのは、「のだ」文は(10)の如く先行命題を認識レベルで捉えて同定する場合と、(11)の如く当面する事態を知覚レベルで把捉して同定する場合のいずれにも用いられることである。

(10) アフリカの原始生活をする部族の中には、蠅やゴキブリを食べる種族もあるが、それは、伝染病の媒体であることを知らずに、抵抗力

の強さにまかせて、習慣的に食べているので  
ある。(樋口清之『食物と日本人』)

- (11) 「あの音は何でしょう。」「庭とすれすれの  
所を小田急線が走っているんです。」(松本  
清張『雑草群落』:田野村 1993)

一方、It is that 節構文は先行情報に対する論理解  
釈や事の真相・実情の同定といった専ら認識レ  
ベルで把握可能な情報を提出する。話し手が発話場  
面で同時瞬間的に直接知覚している事態や出来事  
の同定には補文に小節を伴う構文が選択される。

- (12) A sudden movement out of the corner of Kim's  
eye brought a stifled scream to her lips, [...] *It  
was only Sheba leaping onto the game table.* (R.  
Cook, *Acceptable Risk*)

(12)は眼前の出来事を同時瞬間的に同定し、「シェ  
バが遊戯台に飛び乗っただけなのだ」という「の  
だ」文に対応する。こうした発話場面で瞬間的に知  
覚された事態の同定をIt is that節構文は表現し得  
ない。英語の補文が、認識と知覚のいずれの領域  
に対象が関わるかに応じて選択されることは他の  
言語現象に敷衍しても明らかである。

- (13) a. I saw *that he crossed the street.*  
b. I saw *him crossing the street.*

補文にthat節を従える(13a)は直接知覚の含意はな  
く認識領域での理解に関わり「通りを渡ったのが  
わかった」、小節を従える(13b)は進行中の事態の  
知覚作用を表し「通りを渡っているのが見えた」  
という意味になる。しかし、たとえ進行中のこと  
であっても知覚レベルでの同時瞬間的な同定では  
なく背後の事情として同定する場合にはIt is that  
節構文が用いられる点に注意されたい。

- (14) “People look at overweight people and say, ‘Oh,  
they’re lacking in will-power’ or, ‘She can’t control  
herself,’” Powter says. “That’s not true. *It’s just  
that they’re dieting, and dieting makes you fatter*

and weaker.” (*The Times Magazine*, February 26, 1994)

(14)のIt is that節構文は進行相をとるが、眼前の事態を知覚するままに同定するのではなく、人が減量できないでいることの事情として「実は、彼らは食事制限をしているところなのだ」と断言している。認識と知覚という二項対立は「のだ」文では「の」節の主語のマーカ―「は」と「が」の選択に反映される。

(15) [(NP<sub>1</sub>-wa) [NP<sub>2</sub>-wa / ga VP no] da]  
(NP<sub>1</sub>-TM) NP<sub>2</sub>-TM / NM VP CP be

認識に関わる「のだ」文では、先行する命題が解釈されるため、NP<sub>2</sub> は主題として既知情報を担いやすく「は」でマークされる。一方、知覚に関わる「のだ」文では、事態の知覚と同時瞬間的にその動作主も同定されることから、NP<sub>2</sub> は新情報・総記を合図する主格の「が」が選択される。It is that 節構文の意味特性は話し手の心的態度を表す法助動詞との共起可能性を検証することにより明確になる。

(16) Nobody has invited me to dance. *It {must/may/might/could/\*will/\*would/\*can/\*should/\*ought to} be that I'm not pretty enough.*

(16)は、先行情報を同定する that 節の情報が根拠に基づく推論(must)や現実に基づいた論理的可能性(may/might/could)は表し得るが、根拠のない単純な推測(will/would)、理論的可能性(can)、話し手自身が疑念をはさみ得る論理的必然性(should/ought to)は表現し得ないことを示している。つまり、It is that 節構文は、話し手の論理や根拠に基づく推論を経なければ聞き手には容易に導き出せない命題情報を表現することになる。

次に、It is that 節構文の談話機能について考えよう。指示表現 it は発話に先立って話し手の知識の蓄積に取り込まれている情報を指示すると分析できる(Kamio and Thomas 1999)。It is that 節構文の基本的意味は、先行情報が話し手の知識に取り込ま

れていることを指示表現 *it* で積極的に表示したうえで、その情報を自分のもち合せている知識と関連付けて同定し、解釈することである。そのため聞き手には容易に知りがたい事の内実や真情を披瀝する場面で多用される。次例では *It is that* 節構文は謝罪の弁明や相手の誤解を解く事情を披瀝する場面で発話されている。

(17) a. I must apologize for my behavior in the office, *it's just that* your appearance was a bit of a shock to me. (映画 *Elvira, Mistress of the Dark* の台詞)

b. Don't get me wrong: I'm not interested in dissing Kitty here. *It's just that* I've long been fascinated by Japan's cult of cuteness - it's rather like an obsession. (*BusinessWeek*, June 25, 2002)

*It is that* 節構文は単なる思い付きを相手に伝えるのではなく、話し手が先行情報を発話に先立って十分に認識処理したうえで解釈を断言する。このことから相手を納得、安心させる談話機能が派生する。

(18) "What's the matter?" I asked. "Don't I dance well enough?" "Oh, yes," he assured me. "*It's just that* - well, I thought you said, "May I have your stamps, please!" (*Reader's Digest*, May 1990)

実際の言語資料を観察すると、*It is (just that)* 部分が直後に休止を伴って独立し、話し手が思慮を巡らせながら解釈や内実を切り出す際の談話標識としての機能を果たす用例が確認できる。

(19) a. She looked over at Martin, who looked suddenly unhappy. "This music annoys you, doesn't it?" Martin squirmed. "*It's just* - why can't he sing any one song all the way through?" (L. Moor, *Terrific Mother*)

b. "*Is it,*" she stammered, "*is it that* you don't want me?" (D. H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*)

*It is that* 節構文は相手の誤解を予想し、それに代わ

る話し手の解釈を表現する。裏を返せば、It is that 節構文には相手の解釈の誤りや知識の欠如を問題にする可能性がついてまわる。相手の考えを否定する際に対人関係を良好に保つ緩衝表現 just が It is that 節構文としばしば共起するのは、そうした含意を積極的に回避するためであると考えられる。

参考文献

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 東京:大修館書店.
- Kamio, Akio and Margaret Thomas (1999) “Some Referential Properties of English *It* and *That*,” In Akio Kamio and Ken-ichi Takami (eds.), *Function and Structure: In Honor of Susumu Kuno*. 289-315. Amsterdam: John Benjamins.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』 日本語研究叢書 9. 東京:くろしお出版.
- Otake, Yoshio (大竹芳夫) (2002) “Semantics and Functions of the *It is that*-Construction and the Japanese *No da*-Construction,” In Tania Ionin, Heejeong Ko and Andrew Nevins (eds.), *MIT Working Papers in Linguistics*. Vol. 43. 143-157. Cambridge, Mass.: Department of Linguistics and Philosophy, MIT.
- 田野村忠温 (1993) 「「の(だ)」の機能」『日本語学』 12-11. 34-42. 東京:明治書院.

(信州大学助教授)